

これまでの10年、これからの100年？

文・写真 北詰 美加 (大阪湾ウミウシ観察会)



写真-1 大阪湾のウミウシ

大阪湾ウミウシ観察会は10年目を迎えました。今では月1回、真冬でも磯に行くということが当たり前になっており、鹿児島での観察会もスタートしています。市民参加型の調査としても軌道に乗り、全国展開も始まっているウミウシ観察会のこれまでとこれからをご紹介します。

1. 大阪湾ウミウシ観察会、 構想から10年。もうすぐ10周年！

ウミウシとは

海に棲む巻貝の一種ですが、貝殻を持たない種が多く、色の美しい種や独特の形を持つ種もいることから、海の宝石と呼ばれることもあります。ウミウシは、ダイバーが撮影した写真集などから、海に潜らないと見つからないイメージがありますが、磯の潮だまりにいる種類もいます。

大阪湾のウミウシ

大阪湾の磯では1950年代から、馬場菊太郎先生、濱谷巖先生らの研究者によりウミウシの観察の記録や生態の研究が行われていました。また、和歌山県生物同好会の増田泰久先生により、1973年から2020年まで詳細なウミウシの観察記録の情報が報告されています(写真-1)。

大阪湾ウミウシ観察会とは

「大阪湾ウミウシ観察会」は、公益社団法人大阪自然環境保全協会(ネイチャーおおさか)の中の1つのグループで2015年7月に設立されました。この観察会は、市民グループがスタッフとなって一般市民の参加者を募集し、大阪湾南東部の磯等でウミウシの観察をテーマとして開催されています。この会の目的は、写真集などでそのカラフルな色彩が有名ですが、あまり生きている姿を見ることの少ないウミウシを、大阪湾で一緒に観察することによりその魅力を伝え、さらに大阪湾の豊かさを知ってもらうことです。



図-1 ウミウシ観察会採集地の地図



写真-2 大阪湾ウミウシ観察会の様子

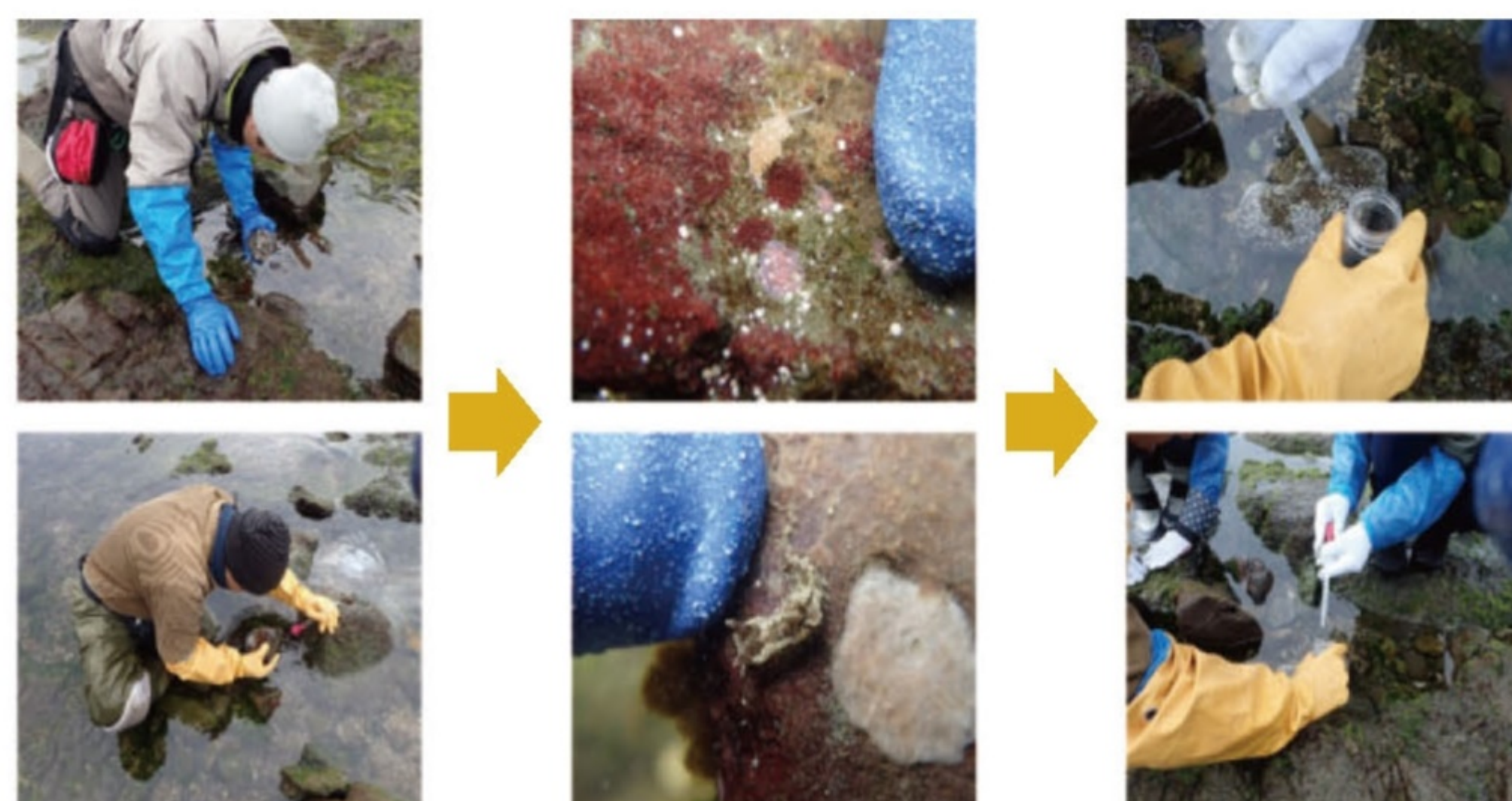


写真-3 ウミウシの採集方法

2. これまで約80回の観察会で、 こんなにたくさんのウミウシを記録しました！

ウミウシ観察会の流れ

観察会は月に1度、潮のよく引く日に、ホームページで一般参加者を募集しています。観察会は主に大阪湾南東部の和歌山市加太・城ヶ崎で行われ、その他、淡島神社近くの磯、大阪府岬町の長松海岸、大阪府阪南市の福島海岸の干潟で行われました(図-1)。最近では、加太・城ヶ崎で毎月1回、1年を通じて開催しています。参加者はスタッフからウミウシの探し方の説明を受け、石をめくりながら潮間帯にいるウミウシ類を探索します。ウミウシは磯の岩の上を歩いていることは少なく、石の裏についていることがよくあります。観察時間は最干潮時を含め2時間ほどです。ウミウシは生息密度が低いので、石の裏のウミウシ

を探すためにはたくさんの石をめくらなければなりません。短時間で探すことはなかなか難しいのですが、多くの参加者で多くの目で探すことにより、観察会では多数のウミウシを見つけることができました(写真-2,3)。

見つけたウミウシは、スタッフと参加者で観察し、種類と数を記録して残しています。ウミウシの種類については大阪自然環境保全協会の田中広樹氏、和歌山県生物同好会の増田泰久氏、きしわだ自然資料館の柏尾翔氏らの研究者を交えて同定を行いました。現地での同定が難しい場合はきしわだ自然資料館で、ウミウシの種類を判別する特徴である「歯舌」などの形態からより詳細な同定を行うこともあります。

観察会としての楽しさ

観察会後のアンケートによると、楽しかった。ウミウシの知識を得られた。という回答が多く見られましたが、その他にもウミウシだけでなく大阪湾の豊かさを知ったという回答も得られました。どんなところでウミウシが見つかるのか。見つけたウミウシは何という種類なのか。などのスタッフの対応も好評で、参加者の3分の1がリピーターとして参加しています。



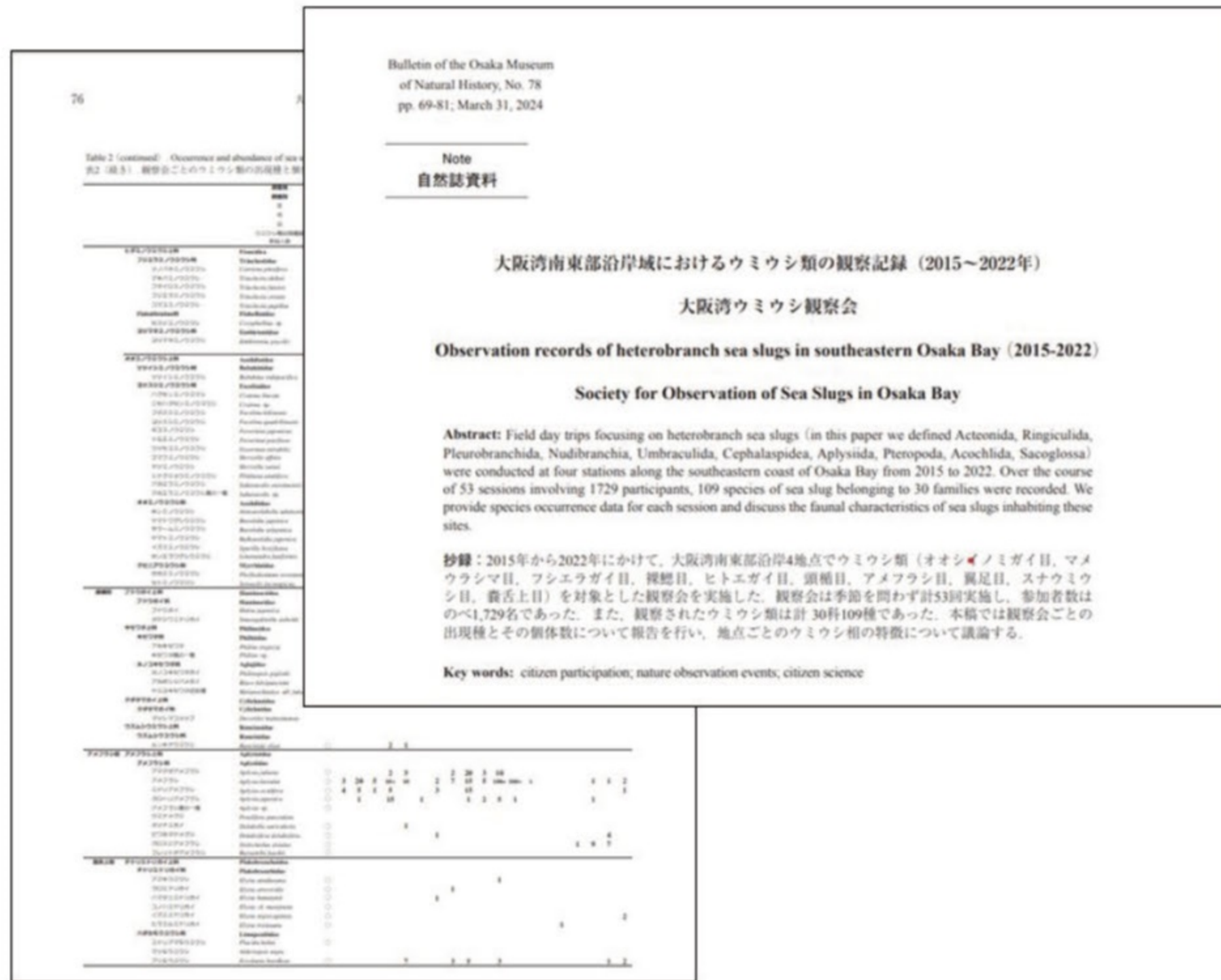


図-2 大阪市立自然史博物館研究報告 (vol.78,p69-81)



写真-4 大阪湾ウミウシ観察会スタッフ写真

3. 市民参加型調査としても、貴重な成果を残しています！ 例えばこんなこと！

市民科学としての役割

一般市民が参加して、様々な生息地や場所でデータを収集する行為は「市民科学」と位置づけられています。そこでは参加者が観察している生物について学び、また科学的な調査が行われる過程を体験できます。

大阪湾ウミウシ観察会では、多くの参加者により多数のウミウシが長期間にわたって観察され、記録されています。これらのデータは「市民科学」によるデータと位置づけられると考えます。同定に研究者を交えることにより、データの信憑性にも問題がないことが大きな特徴です。

参加者は、まずとにかくウミウシを見たいというきっかけから観察会に参加することが多いのですが、次第にウミウシにもいろいろな種類がいることに気づき、異なる種類のウミウシを探したり、既に知っているウミウシを確認していく様子が見られます。通常、子どもは観察会で、自分が見つけた生き物をバケツからなかなか手放さないのですが、ウミウシの種類を確認するために、スタッフがウミウシの名前を記したケースに分けて

いくと、自分のウミウシが何の種類であるかを知りたいという好奇心から、進んでウミウシをわたす姿がよく見られます。

今後、環境問題を考えていく上で、市民が参加する調査の重要性はますます高まり、実施する地域も増加していくことが予想されます。わざわざ調査のために協力者を募集しなくても、通常の観察会を開催すれば、いつでも誰でも参加ができて、イベントのように楽しみつつ、なおかつ学術的に評価できるという市民参加型の調査を行うことができます。

また、観察会という形で市民参加型の調査を継続することから、参加者はウミウシに対して興味、知識を持つという学習のほかに、自分達の探したウミウシのデータを大阪湾の記録として残すことの意味を考えるきっかけになります。さらに、アンケートからもわかるように、ウミウシだけでなく大阪湾にいる多種多様な生物の存在に気づき、これからも海の生物を大切にしようという環境保護の意識につなげることができます。

学術的展開

2024年の大阪市立自然史博物館研究報告に自然史資料として、「大阪湾南東部沿岸域におけるウミウシ類の観察記録 (2015~2022年)」を、大阪湾ウミウシ観察会から発表いたしました(図-2,写真-4)。この内容は、2015年から2022年までの観察会での全出現ウミウシの種類、採集匹数を報告したものです。観察会での記録を内部資料とせず、論文化して国内外に発信できたことは、大きな成果であると考えられます。論文は国内だけでなく、海外からのアクセスも多数見られ、関心の高さが伺われます。また、観察会で得られたウミウシ類の一部は標本として、きしわだ自然資料館で登録、保管を行い、その情報をGBIF(地球規模生物多様性情報機構)に提供しています。さらに、今後はOBIS(Ocean Biodiversity Information System)に海洋生物分布記録として、観察会でのウミウシ出現記録を提供し、国際的なデータ共有に貢献していきたいと考えています。

広げようウミウシ観察会の輪！

文・写真 柏尾 翔(大阪湾ウミウシ観察会/きしわだ自然資料館 学芸員)

来年で発足から10年の節目の年を迎える「大阪湾ウミウシ観察会」ですが、その知名度は着実に高まってきており、最近では広島や東京など遠方から参加する方もちらほら見られるようになってきました。また、観察データの蓄積は現在も継続しており、2022年までの記録は学術的に利用できる形で既に公開しています。まだまだ観察会の運営やデータのとり方については、より良い方法を模索しながら進めている段階ですが、これからも持続して観察会を実施し、その記録を残していく体制をおおむね確立できたといえそうです。

そして、次の10年を見据えて、今年度から「海の学びミュージアムサポート」の助成を得て、きしわだ自然資料館と連携した新たな取り組みがスタートしました。今回、この助成金を申請した目的の一つは、ウミウシの観察会を実施している団体

同士の連携強化です。ウミウシを対象とした観察会や調査研究活動は、数こそ少ないものの地方の博物館や学校、市民団体などが独自に実施しております。そのなかには、博物館の学芸員や地域の有識者が主体となり継続して開催しているところもあれば、団体によっては種同定の問題や採集方法に関するノウハウが乏しい、運営面での問題など課題を抱えているところもあります。また、観察データの蓄積については、ほとんど行われていない状況です。

大阪湾ウミウシ観察会は、2015年以降のべ1,600人以上を対象に観察会を実施しており、運営に関する豊富な知識と経験を有しているほか、どの時期にどんな種類のウミウシが見つかるかについてもデータから導き出すことができます。その一方で、潮汐の影響を受けない日本海側での実施方法や別海域の

出現種についてはほとんど情報をもっていません。このように、大阪湾ウミウシ観察会がもつノウハウを広く共有するだけでなく、団体間で連携しながら情報交換を行い、継続的に観察会が実施できる体制をつくっていきたいと考えています。今年度はその準備段階と位置付けて、10月までの間に鳥取県、広島県、鹿児島県で視察を行い(写真-1,2)、博物館や学校で新たに観察会や調査をするための準備を進めました。来年度以降は、視察を継続しながら、実際に観察会を各地で実施し、同定用資料、ガイドブックの作成も進めていく予定です。

ウミウシは子どもたちの興味をひく色鮮やかな見た目をしており、磯場や干潟、漁港やヨットハーバーなど海がある場所ならどこにでもいます。身近な海に目を向ける人がもつともつと増えるような取り組みにしていきたいと思っています。



写真-1 鳥取県山陰ジオパーク海と大地の自然館で開催されたウミウシ観察会のようす



写真-2 山陽女学院高等学校の生徒との共同調査